グリニッチ福音キリスト教会　マナ 082

Manna

2010年04月25日

【先週のメッセージより】ヨハネ21：1～14

ガリラヤ湖の岸辺で／イエスによる再召命の物語

●イエスは復活後、懐かしのガリラヤ湖で弟子達を最初に召した時に行なった「大漁」の奇跡を再現し、弟子たちを今度はイスラエル宣教という小さな範囲でなく、世界宣教の大きな働きのために「再召命」をされたのであった。

●一人一人のクリスチャンも、仮に専門的な伝道者でなくても、皆何らかの形で「人間を捕る漁」つまり福音宣教に携わることが求められている。この働きは人の永遠を決定する重大な事柄ではありながら、人が福音を受け入れるか否かについては私たちの責任ではない…*勿論熱心に執り成して祈りますよ！…*ということを覚え、「できる所から」始めることが大切である。具体的には先ず、１）他人のために執り成して祈ることから始まり、２）会話の中で自分がクリスチャンで教会に行っていることを知らせる、３）教会や集会に人を誘う、トラクトを渡したりウェブページを紹介する、４）直接福音を語る･･･手紙、訪問、聖研等の手段を用いる、短期宣教師になる、５）何らかのキリスト教教育、教会学校、セルグループ、クリスチャンスクールに携わる、５）教会や宣教団体、牧師や伝道者、宣教師を具体的に支援すること等、いろいろとできることがある。創意工夫は大歓迎である！

●この「漁」はしかしながら普通の漁ではなく、超自然的な働きであり、聖霊の働きへの参加なのだという認識も大切である。いろいろな働きに率先して取組んで行く時、いつしか、自分の力でやっているという錯覚に陥ってしまうことがある。救われる人が少ないと自分に足りない所があると悩んだり、多いと自慢したりしてしまう。弟子たちが一晩中漁をしていても捕れなかったのは彼らの責任ではなく、主の御業が明らかになるために、主が魚をコントロールしたからであることを覚えよう。

●日本の宣教の進まないのも、主の御主権によるところが大きいと思う。しかし私たちは大漁旗を掲げ、主が日本を顧みてくださることを待ち望み、今与えられている小さいことに忠実に取組んで行きたい。やがての日のために。■

【人間関係／赦しに生きること（３）】

赦しの実践

●人を心から赦すことは難しい。しかしよく言われるように、もし私が誰かを赦せないなら、縛られているのは私である。相手は私を傷つけ、不当に扱った事などとっくの昔に忘れてしまっている。損しているのは私だけ。世の中には警察沙汰にするわけはいかなくても生活に否定的な影響を及ぼす問題はあまたとある。自己中心な人がいる限り、問題はなくならず、赦しに生きる道を見いださない限り、平安を得る方法はない。しかし「いいよ、いいよ」と単に「水に流す」だけでは被害者は泣き寝入りとなり、正義が立たない。

●だからこそ私は「十字架」の元に行き、そこで自分の罪のために裁きを身代わりに受けられたイエスを仰ぐ。そこに居続ける時、私は神の赦しと恵みの中で自分の真の罪深さと向き合うことができる。そして自分の罪深さと赦しの大きさを理解した分だけ、私は人に対して寛容になることができ赦せるように変えられていく。

●さらに十字架の元に居続ける時イエスが相手の罪のためにも死なれた事が見えてくる。神は必ず悪を罰せられる方、十字架を通して神が下さる「義」をいただく以外何人も神の裁きを免れないことを知る時、私は裁きの恐ろしさも知る。その時、私は相手もイエスを見上げて救われるようにと、初めて願うことができるようになる。

●世界平和は一人一人から始まる。キリストにある者は赦しを宣言し報復、仇討ちに終止符を打ち、平和を生みだす神の器となるのである。何ごとも最初の一歩から始まる。赦しを実践しよう。

あらゆる努力をして

【今週の暗唱聖句】第二ペテロ１：10

ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。<u>これらのこと</u>を行なっていれば、つまずくことなど決してありません。

●この御言葉の直前に**「こういうわけですから、あなたがたは、<u>あらゆる努力をして</u>、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。」**(2ﾍﾟﾃﾛ10:5～7)とある。これが上記の「これらのこと」の内容であり、クリスチャンが「あらゆる努力」をすべきことである。確かに救いは努力では得られないが、救われた者は、神に喜ばれ、成長したいのであらゆる努力をすべきなのである。それは私たちをキリストのうちに選び、召してくださった神を喜ばせるためである。■